

旧米原機関区の痕跡② —いまでも残る機関区の石碑—

米原機関区には、多いときには職員が600人いたといわれています。米原駅には機関区のほか、客車や貨車の保守を行う客貨車区、車掌さんを管理する車掌区、通信関係を管理する通信区などがあり、鉄道業務に携わる人だけで1500から2000人近い人がいたといわれています。

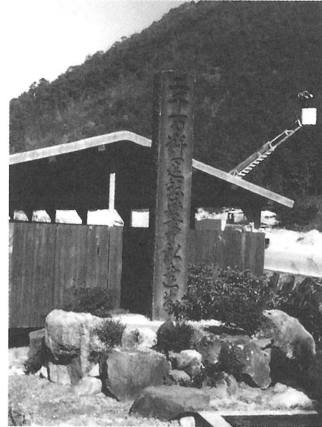
このように、多くの人々が働いていた米原駅・機関区ですが、昭和39年(1964)の東海道新幹線の開通、昭和50年(1975)の湖西線の開通などによる米原駅を通過する列車の減少、そして昭和60年(1985)には国鉄民営化が決定的となり、民営化を前提とした組織の合理化の波に逆らえず、昭和61年(1986)に機関区は廃止されます。明治22年の開設から97年目のことでした。

現在、米原機関区の跡は駅前再開発や駅の改修などにより、その痕跡を探すことは難しくなっています。しかし、米原機関区にあった石碑たちが伊吹山文化資料館の駐車場で野外展示されています。石碑は、「米原機関区門柱」、「二千万軒運転無事故達成石

碑」、そして「電化御遷宮記念石碑」の三本があります。

初めに「米原機関区門柱」はかつて米原機関区の正門にあったもので、「米原機関区」の銘板がついています。次いで「二千万軒運転無事故達成石碑」は、米原機関区の機関車が、二千万キロメートルの間無事故で運転できたことを祝して昭和29年(1954)に建てられたものです。

最後に「電化御遷宮記念石碑」は、昭和30年(1955)に東海道線の名古屋—米原間が電化開業したこと、機関区にあった大神宮社という神社が移転されたという二つの出来事を祝して建てられたものです。(小野 航)



▲二千万軒運転無事故達成石碑(当時)



佐加太とは、「和名抄」東急本の坂田郡の訓を引用しました

伊吹山の山城 —その1—

第45号
2017年3月31日
滋賀県米原市教育委員会

滋賀県立大学 教授 中井 均

はじめに

伊吹山は神の居ます山です。古くは縄文時代より信仰されてきました。仏教が伝来すると神の山伊吹は修行の場となり、平安時代以降には山岳寺院が建立されました。南北朝時代になると、こうした山岳寺院は城郭として利用されるようになります。一見信仰と戦いは相反する対極に位置しているように思われますが、実は信仰の場が意識的に戦いの場として利用されたようです。信仰の山に城を構えることにより、神や仏に守護される城という意識が持たれたり、周辺の人々の拠り所を守る城として民衆の支持を得たものと考えられます。鎌倉倒幕の兵を挙げた後醍醐天皇が最初に立て籠もったのは、山城国の笠置寺でした。また、後醍醐天皇が流された隠岐島を脱出して立て籠もったのは伯耆国船上山の智積寺でした。

近江では守護佐々木(六角)氏頼が南下する北畠顕家軍に対して立て籠もったのが織山の観音正寺でした。六角氏はその後も山を下りず、観音正寺を城塞化した観音寺城を居城として使い続けます。近江は天台宗が盛んで山岳寺院が多く建立されます。守護六角氏や京極氏、さらには戦国大名浅井氏によって山岳寺院が城として利用される事例が少なからず認められます。

太平寺城

少し難しいですが、米原市朝日の観音寺に所蔵されている古文書を引用します。「去五月六日五宮所被成下、令旨称取詮、且抽御祈禱之丹誠、且可致合戦之忠勤云々間令参上太平寺、云城郭結構、云警固忠勞、旁致勤厚之处、同九日為誅罰凶徒被拳御幡之刻、練行之老体者参詣仏前、抽御祈禱之懸念、武勇之若輩者馳、向馬場、致戦功之条、大將軍御見知之上者、不及子細加之、」と記された文書は、五辻宮守良親王の令旨を受けた観音寺の僧は、鎌倉幕府調

伏の祈禱と軍忠を誓って太平寺に城を構えて警護の任にあたり、老僧は祈禱を連行し、若衆は番場(現在の米原市番場)に出兵したことに対する恩賞を求めたものです。ここに記された五辻宮守良親王とは、龜山天皇の第五皇子で、鎌倉時代の末頃に伊吹山の太平寺に通世していたようです。少なくとも伊吹山太平寺は皇室と深く繋がっており、特に大覚寺統は地方の山岳寺院と密接に連絡を取り合い、皇子たちを送り込んで地域の拠点としていたようです。

五辻宮の活躍については『太平記』に「伊吹山ノ麓、鈴鹿河ノ邊ノ山立・強盜・溢者共二三千人、一夜ノ程ニ馳集テ、先帝第五ノ宮御通世ノ体ニテ、伊吹ノ麓ニ忍デ御坐有ケルヲ、大将二取奉テ、錦ノ御旗ヲ差拳ゲ、東山道第一ノ難所、番場ノ宿ノ東ナル、小山ノ峯ニ取上リ、岸ノ下ナル細道ヲ中ニ挟ミテ待懸タリ」とあり、鎌倉に落ち行く六波羅探題北条仲時一行を番場で迎え討ったことが記されています。

さて、その五辻宮が太平寺に構えた城が太平寺城です。太平寺は伊吹山から南西に張り出した標高450メートル付近の尾根に位置しています。仁寿年間(851~4)に三修上人によって整えられた山岳寺院で、伊吹山四ヶ寺のひとつに数えられる主要寺院でした。この太平寺は江戸時代には中之坊などを残すのみとなり、かつての坊院跡は太平寺村の居宅となっていました。しかしそれらの配置はほぼ中世の太平寺の坊院構造をそのまま残しているものと考えられます。

最高所に太平神社が位置し、そこから一直線上に参道が配されています。そして参道の両側には



▲太平寺集落古写真(昭和38年頃)

情報BOX

- ◆米原市教育委員会では、下記の報告書を刊行しました。
『柏原宿寓留帳調査報告書1
近江国中山道柏原宿三〇〇年の著蹟』
※柏原に残されてきた、江戸300年に及ぶ全国的にも貴重な宿場資料です。
- ◆米原市教育委員会では、下記の冊子を発行しました。
『靈仙山 —「江陽四高山ノ其ノツナリ」—』
※米原市には、伊吹山と靈仙山という滋賀県を代表する二つの霊山があります。靈仙山麓の遺跡や山城跡、山岳信仰と山麓の民俗を紹介しています(フルカラー26頁)。
- ◆米原市教育委員会では、地元保存会と協働で下記のマップを作成しました。
『松尾寺史跡トレッキングマップ』
『靈仙山麓トレイルマップ』
※松尾寺山を巡る遺跡ルートと、彦根市・多賀町にまたがる靈仙山麓の見どころを紹介しています。
- ◆米原市教育委員会では、下記の遺跡マップを作成しました
学校のまわりの宝物④「春照小学校区」
学校のまわりの宝物⑤「河南小学校区」
学校のまわりの宝物⑥「息長小学校区」
※各小学校区は、地域性や歴史をコンパクトにまとめた範囲です。
- ◆米原市伊吹山文化資料館では、下記の冊子が発行されました。
『伊吹山文化資料館年報18 —平成27年度の活動—』

◆◆編集後記◆◆

今号と次号、中井さんに玉稿を賜りました。お楽しみください■3年間、編集子の上司として米原市にお勤めで、編集子は「扱いにくい元部下」だった…そうです(笑) ■そもそも「佐加太」も、中井さんが米原町、編集子が伊吹町に勤めていた1995年の坂田郡時代に発行しました■今回めでたく45号です。節目に久々に登場いただき、光栄のいたりです■ここで宣伝をひとつ。編集子が監修にたずさわった『伊吹山を知るわかりやすい 山と人学の本』(3月刊行)にも執筆いただいています■ポケットサイズでカラー115ページ。13人の研究者に、それぞれお得意の分野から伊吹山の歴史・民俗に迫っていただきました■伊吹山文化資料館で取り扱っています。よろしく!(シャンギリっ子)

米原市文化財ニュース

佐加太 第45号

発行 平成29年3月31日
編集 米原市教育委員会
〒521-0292 滋賀県米原市長岡1206
米原市教育委員会事務局 歴史文化財保護課
TEL.0749(55)4552
印刷 ビッグバードデザイン株式会社

階段状に平坦地が設けられています。これが坊院の跡です。かつては太平神社地が太平寺城の中枢部に比定されていました（滋賀県教育委員会『滋賀県中世城郭分布調査6(旧坂田郡の城)』1989)。しかし南北朝時代の山城は明確に人工的な施設によって防御するものばかりではありません。むしろ急峻な山の頂や、山岳寺院を利用する場合があります。それは天然の要害といってもよいでしょう。鎌倉幕府の正規軍である騎兵が登れないような山に立て籠もる行為そのものが城と呼ばれていたのです。観音寺文書の「城郭結構」はまさにこうした行為を記しているのです。

ところで元弘3年(1333)に鎌倉軍が河内国の金剛寺に城郭を構えるという風聞に対して楠木正成が金剛寺の僧兵に抵抗戦を促した文書が金剛寺に残されています。そこには「関東凶徒等乱入当寺、構城郭、可致合戦之由、其聞候、若事実候者、以寺家一同之儀、不被入立候者、尤可宜候哉、御祈禱事、又先度被下令旨候之上者、相構面々可被懸御意候、恐々謹言、」と記されています。太平寺と同じような状況であったことがわかります。金剛寺では寺院内に城郭を構えることを想定している点が注目されます。南北朝時代の城郭は寺院に構えられる場合が多いのですが、それは既に寺院の建物が存在しているからに他なりません。つまり構えるとは施設のことではなく、立て籠もる行為そのものを指しているようです。太平寺城も太平神社を中心に構えられたものではなく、太平寺という寺院そのものの上に立て籠もる城郭だったと思われる。

このように太平寺城には曲輪や堀切、土塁といった防御施設は認められませんが、南北朝時代の城のあり方を示す好事例として評価できます。

弥高寺

明応4年(1495)に記された『船田後記』には「江州大守佐々木政高進師干弥高山」、「政高下弥高山」などと記されています。これは京極政高が弥高寺にいたことを示しています。また、『今井軍記』には「明応五年(1496)六月治部少輔殿御出陣とき中務少輔殿弥高寺にまします御時」、「清遠一身引切弥高寺の御陣へ馳参り」と記されており、弥高寺が京極高澄の陣所として利用されていたことがうかがえます。

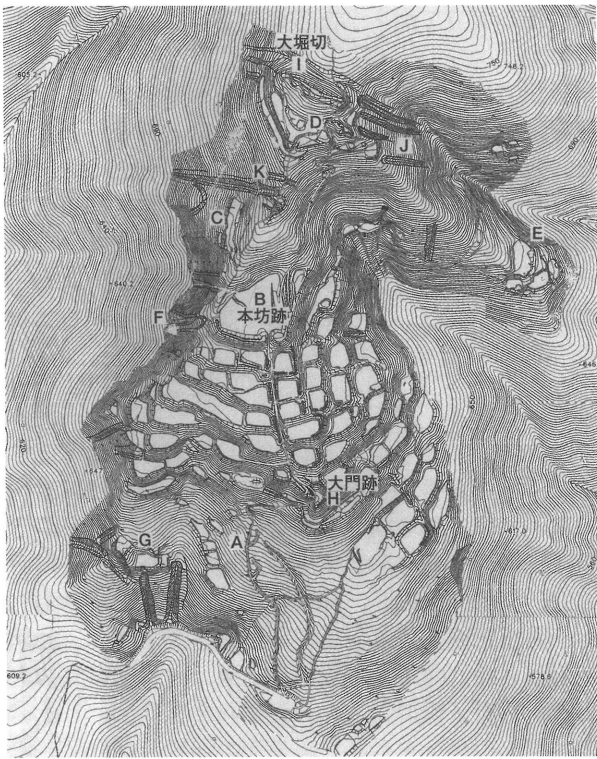


▲弥高寺跡（撮影：高木浩二）

弥高寺とは伊吹山から南に張り出した標高約700メートル付近に位置していま

す。ここは修験の祖といわれる役行者や、白山の泰澄が入山したと伝えられ、三修上人によって整えられた山岳寺院である弥高寺が建立されています。弥高寺も伊吹山四ヶ寺のひとつで、中世には伊吹山寺の中心的寺院となります。

その構造は、最頂部に東西68メートル、南北59メートルの平坦地を設けています。ここは本坊と呼ばれており、本堂が建てられていたところですが、現在もその中央に基壇が残っており、礎石も点在しています。この本坊の中心軸に沿って参道が配置され、その両側には魚の鱗状に坊院跡が累々と配置されており、その数は60に及んでいます。この坊院群の外縁部に大門と呼ばれる門跡があります。坊院の配置は山岳寺院そのものなのですが、大門は中軸線上に配置されてはいるものの、門外の参道は門と一直線上にならず、門を出たところでほぼ直角に西側に屈曲しています。寺院ならばこうした屈曲は必要ないはずですが。さらに大門の外側には寺域を囲い込むように空堀が巡らされています。この門の屈曲は枡形と呼ばれる敵の直進を妨げる城郭施設であり、空堀も敵の進入を防ぐ城郭施設と見られます。また、本坊西側の伊吹山山頂に続く尾根筋には数本にわたって堀切Kが設けられており、明らかに後方からの敵に対する防御施設とみられます。とりわけ本坊背面の尾根には尾根を完全に切断するとつともなく巨大な堀切Iが構えられています。その姿は圧巻です。これは軍事的な防御施設以外のなものでもありません。戦国時代の山城でもなかなかこれほどの堀切



▲弥高寺跡概要図

を構えたものはありません。

ただ、枡形や横堀、背面の巨大な堀切は戦国時代後半に出現する施設であり、文書に記された明応4年(1495)に京極氏によって造られた施設とは考えられません。少なくとも16世紀中頃に築かれたものです。その16世紀改修を示唆するものが発掘調査で検出されました。米原市教育委員会では本堂の一段下の坊院で発掘調査を実施したのですが、現存する土塁が二時期にわたって造営されたものであることが判明しました。その新しい方の土塁の盛土のなかには15世紀の陶磁器が含まれており、少なくとも土塁の構築が15世紀よりも新しいものであることがわかりました。

実は次号で述べる上平寺城は元亀元年(1570)に浅井長政によって改修されたことが明らかになったのですが、その改修は上平寺城だけではなく、谷を隔てた西側尾根上に構えられていた弥高寺にも及んだようです。枡形や横堀といった発達した城郭施設の

河内のオコナイ

オコナイは、村の豊作や大漁、安全などを祈願して1月から3月にかけておこなわれる行事です。西日本の各地で認められますが、とくに近畿地方、なかでも滋賀県の湖北と甲賀両地域に高い密度で分布しています。

オコナイの供え物や神饌(神様の食事)、トウヤの選び方など、同じものが存在しないのも大きな特徴です。各村の村内安全、五穀豊穰を祈るがゆえに、独自の個性を持つ行事が永い年月を経て熟成されてきました。

東大寺で旧暦二月におこなわれる「お水取り」(修二会式)は、奈良時代(752年)のはじまりで、仏に一年の過ちを悔い、その功德で天下安穩、五穀成熟、万民豊樂を祈る法会です。これが、平安時代に山里に広まり、湖北では神社で行われるようになったのが、オコナイのはじまりといわれます。

米原市河内のオコナイでは、餅つきの際に、野菜で鶴亀や男女の陰部、お神酒などを作り板に張り付けます。一方で、丸太を削って大小の男根を器用に作ります。板に張り付けられた男女のシンボルは、子孫繁栄(生殖)や豊作を祈るオコナイらしい供え物です。しかし、市内のほかのオコナイでは登場しない巨大な男根の願いはなんでしょうか。かつては、オコナイのために、よりリアルで立派なものを作るために、山に入って適した木を探してくるのが楽しみだったそうです。河内は林業で栄えた集落です。

存在も元亀元年の改修ならば齟齬をきたしません。むしろ年代的には完全に合致します。従来は浅井長政による改修は上平寺城部分だけだと考えられていたのですが、残された遺構の構造より、上平寺城と弥高寺を併せて改修したようです。このように弥高寺跡は山岳寺院が城郭に改修された構造を知るうえで重要な遺跡といえます。



▲弥高寺大門跡

まさに腕の見せどころです。

河内は霊仙山の山ふとりに位置する山村で、畑はあるものの、稲作は出作りに頼り、主体は炭焼や林業でした。大正7年に河内製材所を設立。深山の良材を集荷するために梓河内施業土工森林組合が、大正11年から10年計画で、総延長12.3キロの林道を開いて、昭和40年頃まで、木を曳き下す木馬の音が響き、賑わいをもたらしました。

民俗学では、「山の神はものを生み出す」ことから「女性」とされ、この考えは全国に広く分布しています。山は、われわれに水や食べ物、衣装や住まいの材料を生み出し、与えてくれます。秋田マタギには、男根を露出して、山の神に捧げる踊りがあります。近隣でも西美濃の「山の神」では、松の木三本を束ねた巨大な男根(大垣市青墓町)や、新鮮な青首大根で作ったもの(揖斐郡池田町)が供えられました。

山林労働者たちは、山の神の加護を得て、山の神の賜りものをいただき、山での災害を恐れました。山の女神に、生命力の根元、活力に満ちた男根を供える山の神まつりが、河内のオコナイに取り込まれ、大切に伝えられてきたのではないのでしょうか。(高橋順之)



▲河内の男根